

西海の孤島に残る 有田焼タイル

長崎県佐世保市の沖合いに浮かぶ黒島には明治33年から35年にかけて建設された「黒島教会堂」があります。当時、黒島に着任していたフランス人宣教師マルマン神父の設計で、神父の献身的な努力と、島民の協力によって完成した建物は、レンガ作りで屋根は3層構造となっています。

この建物の中の祭壇に敷き詰められているのが、有田焼のタイルで、焼いたのは有田・岩谷川内の窯焼だった松尾徳助です。過日、そのタイルを見るために黒島に渡りました。

タイルの定義は『日本陶磁大辞典』によれば「主として建築物の表面を覆う陶磁器製の板」とあります。現存するタイルで最古の例は、エジプトのサッカーラ・階段ピラミッド内陣にあった、紀元前2700年ごろのブルータイルとされます。日本の最も初期の作例として承応元年(1652)の瀬戸・常光寺の源敬公廟(徳川義直)の褐色釉の敷瓦、江戸中期の京都西本願寺・転輪蔵の腰壁を飾った柿右衛門様式の色絵陶板などがありますが、盛んに使われたのは幕末から明治にかけて長崎や横浜などに外国人家屋が建築されてからのことでした。マントルピース(暖炉の装飾枠)の前敷や風呂、洗面場などに輸入した磁器製のタイルが貼られています。



松尾徳助氏

国内では明治12年から瀬戸の本業タイルが生産されるようになったとされます。有田では前述の松尾徳助が明治32年(1899)に焼いたのが最初だといわれます。この松尾徳助という人物はどのような人だったのでしょうか。子孫にあたる松尾博文さん(神奈川県川崎市在住)から提供された「松尾徳助傳(作者執筆年代不詳)」と

黒島教会堂全景



祭壇のタイル

いう資料があります。これによれば徳助の父勝太郎は明治4年(1871)、長崎でジョセフ彦(浜田彦蔵 1837-1897)と出会い、これからの時代は海外貿易だと大志

を抱き、外国人に好まれる焼き物作りに取り組みます。明治6年、長崎広馬場に店を開き、同16年徳助は単身香港に渡り、磁器の販売と商況の調査を行いました。その後、石炭焼成による素焼窯や半胴(磁器製傘立て)など果敢に新しい分野に取り組みます。その中に当時敷瓦と呼ばれたタイルもありました。明治35年(1902)の第7回西松浦郡陶磁器品評会では、この敷瓦で2等賞を受賞しています。おそらく、この折の製品が黒島教会堂の祭壇に使われたのではないかと思います。十字架にも見える染付の文様でその数は千枚以上にのぼり、1枚の大きさは183~185mm角で、裏面には「肥前有田 松尾製造」の刻印が確認されています。

今は現存しませんが、長崎市にあった高島炭鋳田長崎事務所の1階ベランダにも形状及び刻印が全く同一のタイルが使用されていた事が確認されています。長崎にあるレンガづくりの教会は16棟ですが、黒島以外でタイルを使用した例はありません。どのような経緯で有田焼のタイルを使うようになったのかはわかりませんが、有田から遠く離れた孤島に残るタイルは明治の新しい時代を迎え、時代の要請に応じた焼き物作りに取り組んだ先人の思いを伝えています。(尾崎葉子)



黒島教会堂に関して「長崎の天主堂と九州山口の西洋館」(太田静六著)があります。松尾徳助製造のタイルは当館に所蔵しており、徳助に関しては「有田町史 陶業編Ⅱ、商業編Ⅱ」など。その他の参考資料「アメリカ彦蔵自伝1, 2」(東洋文庫)

皿 季刊 山

2003
冬

No.60

館長随筆 元旦には 「日の丸」の旗を

祝祭日には家の軒先に“日の丸”の旗を掲げますが、祝祭日に有田の街を歩いてみて“日の丸”をかざしている家が実に少ないのに気がきます。

歳が判ってしまいますが（笑）、私共が小さい頃は一般家庭では祝日、学校は入学式、運動会、お役所は毎日、会社は入社式、記念式典に掲げていました。泉山の石場相撲でも日の丸をあげていましたネ。その頃を想うと現在の祝日は寂しいなアと思います。

「日の丸」のはじまりは大宝元年（701）元旦からとされています。国際的になったのは万延元年（1860）日米和親条約、日米修好通商条約の批准書交換の為に、新見正興らが米国に渡航したとき「咸臨丸」に「日の丸」を掲げたのがはじまりです。そして文久2年（1862）水野忠徳が父島に領土表示の為に「日の丸」を掲げます。

ところが、昭和20年（1945）敗戦でGHQにより、日の丸の使用が禁止されます。これが全面解除されたのが昭和27年（1952）4月3日でした。平成4年（1994）10月に村山内閣が学習指導要領の中で国旗掲揚と国歌斉唱を義務付けます。そして法制化されたのが平成11年（1999）11月8日の「国旗及び国歌に関する法律」でした。

皆さんも「日の丸」の歌をうたってみませんか。

♪白地に赤く、日の丸染めて、ああ美しい日本の旗は
♪朝日の昇る 勢い見せて ああ勇ましい日本の旗は
この「日の丸の旗」のデザインの意味は、「赤い丸」が朝日を表しています。古来、稲作を中心に生活してきたわけですから、太陽の恵みに感謝し、それを信仰の対象にしてきました。「丸」は円満を意味します。「赤」は誠、明るさ、情熱、勢いを表します。「白地」は純潔や潔白を表しています。

皆さん、ご存知と思いますが国旗を掲揚するに当り留意すべきことを参考までに述べます。

- ①日の丸の旗の汚れたもの、破れたものは使わない
- ②国旗掲揚と国旗を夕方に降ろすとき、周りの人は起立し脱帽すること。海外で日本人がこれをせずに、その

国の警察に連行されたことがあります。

- ③国旗は建物の外側から見て左側に掲げます。二本の国旗を交差して掲げるときは、左側を手前になるようにします。
- ④外国旗と交差するときは、敬意を表して、外国旗を左側にします。
- ⑤3カ国以上の国旗の場合は、日本の国旗を中心にして外側から見て左、右とアルファベット順に並べます。話は変わりますが、「国歌の話」をいたしましょう。

今年も有田町産業祭式典や有田中部小130周年記念式典では、会場に「日の丸」「町旗」などが掲げられ、出席者全員で国歌を斉唱しました。

日本の国歌は、古今和歌集「わが君はちよにやちよにさざれ石の巖となりて苔のむすまで」からきております。世間には国旗、国歌を侵略戦争や軍国主義の象徴のように唱える人がいたようです。これは感情論みたいなもので、例えばナイフを強盗が使えば凶器となるが、名医が使えば、人を助ける医療器具となる。即ち人それぞれのとらえ方であるわけです。

中華人民共和国の学校では、校内に国歌が流れ、続いて国旗掲揚で一日の授業が始まります。紅い生地に四ツ星（労働者・農民・インテリ・小資本家）です。

フィリピン共和国では、毎朝7時半に国旗掲揚があり「国への愛、良き国民、よい家族の一員、良き学生としての義務」を全生徒が誓います。

アメリカ合衆国では、全生徒が国旗にむかい右手を胸にあてて国への忠誠を誓います。

国旗も国歌も、それぞれの国の成り立ち、歴史、伝統、宗教、文化が大きくかかわっているのです。

皆さん、元旦には「日の丸」の旗を掲げ、日本人としての誇りを示したいものですね。（久富 桃太郎）



通信事業50周年の記念写真。
（有田郵便局は、明治18年11月開設。今年で118年となる）

焼き物荷を運んだ 皿山街道を歩く

先月のこと。10月19日、26日の2日間、江戸時代に有田焼が運ばれた道をたどるウォーキングが開催されました。19日は「塚崎・唐津往還を歩く会」(世話人馬場良平さん)が主催し、有田泉山を出発して有田内山～外山(本町・原宿・南川原)～西有田～伊万里のルートに残る古道をたどりながら20キロを歩きました。長崎や北九州などからの参加者もあり、総勢23名。有田からは7人が参加し、完歩しました。



ワラによる荷造りをする橋本さん

26日は(社)陶都有田青年会議所が主催した「心のふれあい感動塾・古伊万里ロードウォーキング」で、子供たちを中心に行われました。まず荷師の橋本勝さんが昔ながらのワラによる荷作りの実演を行い、その荷を約70人が交代で担って、有田～宮野～伊万里のルート・13キロを歩きました。



焼物荷を運ぶ子供たち

江戸時代、数多くの有田焼が国内はもとより海外に売りさばかれたことはよく知られた事実です。しかし、実際有田皿山で焼かれた焼き物が、どのような道をたどって伊万里の港まで運ばれたかというのは、よくわかっていませんでした。今回、それぞれ下手路、上手路と呼ばれた道をたどって歩きたいという方々から当館にそのル

ートの調査を依頼されました。それをきっかけに、江戸時代の古地図や文献などをもとに、焼き物運んだ古道を地図上に復元することができました。

さて、江戸時代日本全国を歩いて実測した伊能忠敬^{※1}という人をご存知でしょうか。彼は50歳で隠居し、19歳^{※2}年下の天文方・高橋至時に師事して天文学を学びました。その後、全国測量を開始しますが、この測量隊は有田郷も踏査しています。

文化10年(1813)9月21日、大村領波佐見村を出発し、岩峠を経て戸矢、大野、南川原、乱橋(三代橋)あたりを調査しています。この時宿舎としたのが岩谷川内の焼き物屋・八十右衛門宅で、大きな家であったことが記されています。残念ながら、まだこの八十右衛門を特定することは出来ません。

翌22日、6時ごろ岩谷川内を出て、外尾から測量を始めます。再度、内山に入り稗古場、赤絵町、本幸平、白川、上幸平と進んで、笹屋政五郎(この人物も特定できません)の家で小休止をとっています。この間の戸数は683軒であると記しています。その後測量隊は杵島郡立野川内へと進みました。

これらを記録した『伊能忠敬測量日記』のなかに「皿山街道」あるいは「有田街道」という名が出てきます。とても響きのよい名称だと思いますが、いかがでしょうか。最近では道路そのものが大きく変化する中、わずかに残る古道をたどって歩くことで、牛馬の背にくくりつけたり、「荷担い人(ににゃあにん)」がおおこ(天秤棒)で担いで運んでいた当時の苦労の一端を実感することができました。

現在では車両による運搬は当たり前のことですが、車も鉄道もない時代に有田から伊万里の港まで人力で運んだ焼き物の量を思うと、改めてこの道を次世代に伝えていきたいものだと思います。(尾崎葉子)

※1 伊能忠敬

1745～1818。上総国(千葉県)に生まれ、18歳で佐原の名家伊能家の婿養子となり、50歳の隠居後高橋至時に入門し天文暦学を学んだ。全国測量の期間は約16年半、その距離は約4.4万kmに及び、いわゆる伊能図を作成した。

※2 高橋至時

1764～1804。大坂の定番同心の子に生まれ、算数暦算を好み、天文方に任命された。年上の弟子・伊能忠敬を指導して全国測量を完成させた。

資料館日記抄

① 博物館実習生の受け入れ

8月18日～24日までの1週間にわたり、3名の実習生を受け入れました。実習生は木村淳さん(東海大学)、岡部照海さん(東亜大学)、毛利葉子さん(筑波大学)で、期間中、資料の取扱実習や古文書教室、町屋の模型作り、広域圏組合主催の「親子歴史探訪」の引率など、学芸員として町民と接する姿勢を学んでもらおうと多様なプログラムを組んで、実習に参加してもらいました。

② 町屋の模型作り教室開催

8月19日～20日の2日間、町内の子供たちを対象に町屋の模型作り教室を開催しました。有田町が進めている事業に「有田の町並み保存」があります。未来を担う子供たちに有田の伝統的な町屋を残そうという思いを育ててほしいと始めた教室で、今年で3回目の開催となります。参加者は延べ24名の5、6年生で、今年は博物館実習生もサポーターとして参加し、にぎやかに作品作りが進みました。



模型作りに励む子供たち

③ 「有田文様」来訪者の案内

9月12日～27日にかけて、佐賀県陶磁器工業協同組合が主催した「伊万里・有田焼産地プロデューサー」事業で、大消費地から有田を訪れた来訪者に有田町のよさを知ってもらおうと泉山石場からトンバイ堀の裏道などを案内しました。東京や大阪などから来有された約700人の方々に、「普段着の有田」を見学していただきました。

④ 直木賞作家・山本一力氏来館

「あかね空」、「大川わたり」など江戸の市井の人々を表現して定評のある作家・山本一力さんが、今回は有田焼の職人の世界を書きたいということで、資料調査に来館されました。

小説の世界に有田皿山がどのように描かれるか、楽しみです。ご期待ください。



石場を見学中の山本一力さん



～歴史と共に～

大蛇の囀き 今年の有田くんちは

10区の出演で盛り上がりを見せた。

また850年前の黒髪山大蛇退治にちなむ道踊りもあったが、主体の5区の子供が急速に減り町内全体の子供に参加を呼びかけている。希望の方は松尾米穀店(42)2533まで。

伝統的建物の白壁をスクリーンに 11月3日夜、中の原「原榮三郎美術館」周辺の白壁をスクリーンに見立て大正時代の有田をはじめコンピュータグラフィックが写し出された。古い建物と現代との調和、これも輝く有田づくりのひとつといえます。

(久富桃太郎)

季刊『皿山』

通巻60号(平成15年12月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185